

兼好法師物見車

近松門左衛門作

徒然なるまゝに日ぐらし硯に向ひて。心書。聲をかしくて拍子とり痛ましうする物に映り行くよしなし事の手習よ。人に言ふべき思ひならねば神の御願に事寄せて。毎日の御物詣貴船吉田大原野。松の尾平野梅の宮祭過ぎて。今日は又。後の葵の下簾。御車

の賀茂の河原を。とゞろかす。五緒は極る位のみならず。忝くも後字多の院第八の姫御子。卿の宮と申し奉る。品形より心ばへけに人間の種ならぬ。スエテ竹の園生の篠竹の。地その忍びねの憂節も。色香に染める御心ゆる。フシ男えらみの聞の中。既に十九の月雪も。フシひとりの友と眺め捨て。地お腰元よりお茶の間のあや

しの下女に至る迄。見目は次でも男なく小いたづらなを選び立て。作文和歌管絃の道好色に意氣方の。手なんと拙からず走り

景を。御物語申されよと。フシ御車をこそ立てられけれ。地こゝに大織冠十九代。ト部の象顯が三男吉田の兼好。其の時は左兵衛の佐にて候ひしが。出衣のつま近々と進み出でければ。すだれ押し遣り姫宮も榻に

こほれおり給ひ。折節の移り變れば名所の。野山の色も立ちかはる。致へてたもと諸共にオクリ語りつゝ問はせ給ひけり。

四季の段

先づ御車の丑寅や。昔男の此の山を二十重

ねて駿河なる。富士に譬へし比叡山都の富

士とも。又は天台四明が洞。我が立つ袖ともフシ申すなり。フシ一際心も。浮き立つ

は。比良や横河の春の頃。フシ花もやうく。景色だつ花見の使早馬に。フシ鞍馬の山の雲珠櫻。静原山の。山樵も何を思ひに八瀬

大原。戀を芹生の里人が。薪に。蕨。草は山吹藤杜若躑躅。卯の花。結び添

へて。つづら。つづら折をばゑい。ゑいさつ

さゑいさつさ。ゑいころくく。フシ小

石流るゝ貴船川。川瀬の柳又をかし。市原

二の瀬幡枝や蚊遣ふすぶる賤屋の軒を。ほとく叩く水鶏の鳥。六月穢亦をかし。御

手洗川に歌さんざらめくは。蟬の時雨か松

風か。松風の。音でないよのさゝれ小鮎かの。登りのほるや。フシ高野川。西に清瀧鳴

瀧山式子の君の浮名立つ。定家葛の這ひか

かる。オクリ軒端の。松は五葉もよし小倉の。山の。一本薄。いつ穗に出でて亂れ。亂れあふひの。フシ野の宮や。太秦戸無瀬高尾山

早稻田刈りほすなんどこそ。フシ野分の朝
をかしけれ。フシ御室法輪。嵯峨の御寺オ
廻らば。廻れ水車の輪の。臨川堰の川波
川柳は。水に揉る。枝垂柳は。風にもま
る。ふくら雀は竹にもまる。都の牛は。
くるくる車に。茶臼は挽木にもまる。地字
治に。續きの三室山。かの十帖の名所まで申
せば源氏物語。まくら草紙に似たれども同
じ事また岩清水。いはねば腹もふくる。わ
ざ御所より見ゆる山々も。御車より御覽じ
て所かはれば人心。かはらぬ山も珍しく初
めて見たる如くなる盡きせぬ景色に候と。
袖かき合せ語りければ御供の女房たち。名
所の景より兼好が。言葉の色に氣を移し
シ顔を。見とれて立ち給ふ。

地姫宮興に入り給ひテ、よういやつた兼好。
明けくれ眼なれた山々も所をかへて見る時
は。又あらたまつて珍しい。爾そなとも院
參御番の時殿上で見るは常の事。地今こ
で見る顔は又はんなりと懐しう。可愛らし
う恥かしう北面とは思はれず。本の殿御と
思はる。神の司の吉田の兼好。此の姫宮は
しんぞよし田にもまる。一つ車に打乗せ
てとてもの事なら一もみに。もまれたいぞ
と直垂に縋り付かんとし給へば。兼好は飛
びしさりこは勿體なき仰や候。一歳たび
御玉章を下されし時。様々御意見申し
上げ重ねて仰せ下されば。兼好出家仕り深
山に隠れ申さんと。申し切り候へば御承引
まし。思ひ切るとの御誓言。其の上
今の御戯れ兼好に罪なくて。配所の月を見
せ給はんとの御心か。地なまなか烏帽子装
束して男の數につらなる故。是にて只今誓
切り。遠き山家に跡をくらし申さんと。
指訓に手を掛くればあれ留めてくれ腰元ど
も。しばし。と宣ひて。爾あ。恥かしい
兼好。扱は眞實いたづらと思やるさうな曲
もない。定めて沙汰にも聞きつらん律氏の
執權。高の武藏守師直みづからに見ぬ戀し
て。地妻にほしいと奏聞す。あのむくつけ
な野暮天奴にそもや一夜も添はれうか。と
かくそなたと自らが夫婦なりと披露せば。
威勢を振ふ師直もさすがに天下の執事なり。
男のある身に逆な無體をいはん様もなし。
聞きわけてさへたもるなら兄弟へも申し
上げ。世間むきの嫁入して。寢所かへて寢
るからは互に後の言譯立つ。地そなたの身
では不祥な事姫宮とあがまへて。女房に持
ちながら一つ枕に寝もせぬは。作の佛に利
生がないと。思つてもや頼むぞとスエテ打
涙ぐみ給ひける。兼好も手を打つて。感
じ入りたる御心其の趣。とつく承り及び
御笑止に存じ。何とぞして師直に思ひ切ら
せんと思案をめぐらし。侍従と申す辯舌の
女を以て。出雲の國の住人。鹽治判官高貞
が妻の美質を語らせて候へば。移氣の驕者
彼の妻に又見ぬ戀して君の御事ははつたと
忘れ候よし御心安く思召せさり乍ら。義も
辨へぬ無道者。鹽治が妻の艶書を某に書け
と申せし間。梵網經を和け。古今集十戒の

早稲田刈りほすなんどこそ。フシ野分の朝
をかしけれ。フシ御室法輪。嵯峨の御寺オ
廻らば。廻れ水車の輪の。臨川堰の川波
川柳は。水に揉る。枝垂柳は。風にもま
る。ふくら雀は竹にもまる。都の牛は。
くるくる車に。茶臼は挽木にもまる。地字
治に。續きの三室山。かの十帖の名所まで申
せば源氏物語。まくら草紙に似たれども同
じ事また岩清水。いはねば腹もふくる。わ
ざ御所より見ゆる山々も。御車より御覽じ
て所かはれば人心。かはらぬ山も珍しく初
めて見たる如くなる盡きせぬ景色に候と。
袖かき合せ語りければ御供の女房たち。名
所の景より兼好が。言葉の色に氣を移し
シ顔を。見とれて立ち給ふ。

和歌を引き女の罪をおどろかし。貞女の道

の教訓を細々書いて送りしかば。地彼の女

手にも觸れずさよ衣として投げ返す。それよ

り其の兼好め門外へも寄するなど。音信不

通に罷りなる。己れが威勢を鼻にあて出入

させず兼好が。迷惑がると思へども此方

は結句悦ぶを、フシ鬼に取りられし如くなり。

地御身の上もお心やすう思召せとぞ申しけ

る。地官は殊なる御機嫌にて。嬉しい事を

聞きしよな。戀に氣轉な兼好やそなたの様

な戀知り。惚れそこなうて口惜しい平人

の娘と生まれたら。人手にかける男でない

王の娘に生れて。姫宮にたふされた。詞や

れ腰元ども。れきく若い身を持つて。地

あのやうな戀知りを外の者に添はせては。

何と口がきかれうぞあつたら物をと真ば。

さあお許しが出た日頃の思こちが先ぢやい

や我ぢや。三年先から文やつた。七年前に

いひかけた覺があらうと縋りつき。袖を引

くやら縋引くやら、フシ更に差別はなかりけ

り。地さすがの兼好持て扱ひ袖打拂ひ逃け

まはり。詞ア、森しいやかましい。是は戀の

大晦日か。七年五年の古戀ならばいきまは

つてござれ。愛着の道其の根深く源遠し。

地六塵の樂欲多しといへどもたゞ此の惑ぞ

やめがたき。詞才能は煩惱の増長學んで知

るは智にあらず。可不可は一定なり無常の

念に來ること。地龍の水よりなほはやし。

すは其の時に至つて老ひたる親いとしき子。

君の恩妻の情捨てがたしとていかゞせん。

萬事は皆非なりいふに足らず願ふに足らず。

文字は同じ文字にて兼好とよめば俗體。兼

好とよめば法師なり容とても黒髪を。剃る

と剃らぬに僧俗ありいでさらば兼好が。け

んかうになる是見よと直垂の紐引きちぎり

く。ふはとぬいで捨てれば下に黒染五

條の袈裟。烏帽子かなぐり取つたればかね

て頭を剃りこほし。つけ髪したる風折や。

包むにあまる遁世の、フシ世を面白く見立て

たり。地官は驚きおはしましかなんかおこ

とが天台の。教を學び莊老に心を寄せ。歌

の道に思をのべ無常を心にかくるとは。常

々に聞きけれども是は餘りに遠だし。我が

身の縁の片付く迄見届けてくれぬかと。衣

の袖に御派名残つきせぬ御有様。兼好答と

思ひして。思ひ立つ木曾の麻衣淺くのみ。

染めてやむべき袖の色かはと。袂振切走り

行く月に慥がれ露に臥し。不束ならぬ隠遁

は末の世までも兼好と。鳴くや吉田の雉子

の聲花鳥を。友とぞ三三〇〇〇〇樂しみの、フシ時

を得たるや。地天下の執事高の武藏の守師

直は。朝家の覺え武家の崇敬。驕日々超

過して、フシ酒宴女樂に日を送る。地頃は水

無月十日あまり青葉吹き來る山風の。音羽

の瀧に涼みの會夏の花見て遊ばんと。洛中

の細工人を召集め。五色の絹にて造り花地

主の櫻に付けければ。一夜の中に爛漫と再

び春に立ちかへり。山郭公聲はちて老いの

驚法華經や。觀世音の誓かと。老若男女も

裾をそめ、フシ袖を連らぬるばかりなり。地

其の身は舞臺に慢幕うたせ。金欄の梅に坐しければ。藥師寺二郎左衛門公義を始めとし。お出入の大小名追従袴庵按摩取。お頼の塵とり百千鳥口々囁る嘘嘘。勾欄に打ちもたれ往來の女の品定。悪女には唾はき中の女に酒をかけ。美女が通れば扇にて散らしかけたる造花。袖には志賀の山越や。踏分けて行く八重櫻。今日九重の京雪踏。フシ奈良草履とぞ匂ひける。地されども師直浮かぬ顔。加これなう藥次。師直が身の榮花忽ち夏を春にして。京中の女を一度に見れど我は一切面白からず。地鹽治判官が女房此の胸にしみついて。心肝を惱まする。詞歌學者と思ひ兼好めに。文を書かせて遣つたれば手にも觸れず。地小夜衣とてなげ返す。我がつまならぬつまな重ねそと。結句意見にあづかる。今日はかの上臈。瀧詣と聞きし故。此の會を催せしが媒介の侍従めが。まにあひの偽か今において侍従も見えず。呼びにやれといふ所へ侍従伺候といひ

ければ。そりやめでたい地主の櫻も取つて抛れ。嵯峨も御室も君にとよめた首尾はどうちやと取廻す。調いかにもいかにも近日鹽治判官。北國へ軍立ち其の立願にかの奥様。三十三度の瀧詣地もうそれそこへといひければ。エ、早う拜みたいとフシきよろくするも。土氣なり。地幕を下けよ音するな。あひだ遠くば遠目鏡近くへ寄つて物言は。外郎つめとさはめきて今や。くくと三重。松風や。フシ裾に模様真葛原。たが染めかねし染浴衣。供の女中と一様に。紛らかしても紛れなき。フシ腰にしきみの淺縁。地皆水晶の百八と。水の白玉光りあひ音羽の漣つ絲筋も。手にくりとむる瀧詣。ちぎに瀧見の觀音の。フシ影向かとぞ怪しまる。地三十三身かたどりて。三十三度の足早く讀誦の聲も口ばやに。下オン妙法蓮華經觀世音菩薩普門品第廿五爾時無盡意菩薩。即從座起偏袒右肩合掌向佛而作是言世尊觀世音。地菩薩つくさ。ふいふくくの下

り上り。跣足に石の階段も心あれかし。いたく。地侍従幕の物見よりあれく先なが彼のお方と。指をさせば師直チ、言はいてもさう見えた。見事々々堪られぬ。聞きしに増すとは此の君とぞ盃頂く間。これへ來迎なさるる様に頼むく。と手を合すれば。侍従はとても叶はぬ事好い退き機と分別し易い事く。呼びまして參らんと。被衣打ちかけ西門へ。フシ走りて京へ逃けにけり。地師直は欄干に願もたせ首を伸べ。待てどもいなせの返事なし。詞ヤア扱は侍従が外したか。但し女が承引せぬか。地いかに藥師寺計らはれよと。氣色變つて見えにけり藥師寺機嫌背かじと。あつといひて立ちけるが粗忽にはいかゞと。心を奥の千手より立歸るにはたと逢ふ。詞申しく。是は鹽治判官高貞の御内室候な。本堂の舞臺に執事高の師直殿。御酒宴とも憚らず浴衣の體にて立騒ぎ。塵を蹴立つる狼藉ちきに言譯有るべしとの。御説なりといひけれ

ば北の方打笑ひ。ム、珍しい徒歩跣足で身をやつす。佛様への敬ひが師直様へは慮外になる。地申譯して濟むならば追付けそれへと宣へば。然らば直に御供とオクリ連れ立ち舞臺へ出でらる。鹽冶判官高貞はかねて妻の物語。一期の浮沈と夕紅の緋織の腹巻。平文の練貫に唐繡したる上製帯刀の大口襖取つて。笈袋つけたる大太刀丸鞘巻の打刀。深編笠にて顔隠し執事にもあれ何にもあれ。首捻切つて棄てんず物と氣もせきのほる坂の上の。田村堂に立つたる姿ちらと見しより北の方。鐵金の楯よりもなほ確なる嬉しさと。目くばせしてぞ出で給ふ師直幔幕上げさせ。有難い御影向我等が念彼觀音力。歴劫不思議の御縁なり。同此の頃侍従が御返事に小夜衣とは怨めしい。鹽冶は此の度北國の討手をいひつけしが。敵には畑六郎左衛門などいふ。鬼神も欺く剛の武者。千に一つも鹽冶が生きて歸る様はなし。後家になつてうるたゆるは

如何にしてもおいとしい。地今日から師直がお身の上を請取つた。小夜衣の衣更ちよつと此處で濡衣と。抱きつけば振放し。ア、事あたりしい。武夫の習ひ軍に立つは修羅の門出生きんと思ふ者はなし。師直様も其の通り。敵味方とならば夫の鹽冶が太刀先で。其のお首を只今でもころりとやるまいものでもなし。地其の時こなたの奥様は後家。今から頭を判りこほし小夜衣の衣更へ墨衣の用意あれと。立たんとなれば藥師寺袂を引きとめ。ア、心にかゝるは御尤。是は殿の御誤。藥師寺祝ひ直すべし。あゝの繪馬を御覽あれ。坂の上の田村磨鈴鹿の鬼神を滅す所。鹽冶殿が北國の討手に向ふ旗の上に。ウタと千手觀音の。光を放つて一度放せば千の矢先。雨霞と降掛つて敵は残らず討たれにけり。有難し有難しや。是。地觀音の御引合。めでたいめでたい一獻とラシ銚子を持つて立ちければ。地ナ、繪馬に準へ給ふならばあれこそ木曾の思ひ

入。巴が馬上の女武者石より堅き石田が首。鞍の。前輪におしつけて捻ぢきり。きり。きり、とめぐる巴の丸。師直殿の御首で。一つ巴が御所望か。藥師寺をへて二つ巴。ありあふ人々片端より三つ巴四つ巴。六つ武藏の基盤忠信橋辨慶。給馬のまなびはいづれでも御所望次第と聲高く。遠にしつけ張替も後には我が夫。百萬騎の味方より心強さと目をつかふ。鹽冶は釣元くつろけてすは駆出でんと氣を配り。夫婦目と目を三日月に。フシ明星輝く如くなり。藥師寺鹽冶をちらと見てこはにがくしと胸顫ひ。所詮此の場を興になしてしまはんと思ひ。これ御覽せ足は覺一檢校が。常に奏づる和田酒盛。御執事を和田殿藥師寺は朝比奈。この上臈を虎御前に振らへ某一曲仕らん。地是を學んで御酒盛千秋樂を謳うて。めでたう。御立ち候へとエテわななき聲をぞ張り上げける。扱も其の後。和田の義盛九十三騎の人々は。山下宿河原

長者の宿所に集りて。夜日三日の酒盛はフシ音にふれてぞ聞えける。地されども和田の心さす。虎は座敷へ出でざれば。和田は大きに腹を立て。伊豆に北條武藏に秩父。

扱相州にて此の義盛なんどが。地酒盛せんする座敷へ虎は召さずと出であひて。扇の一手も舞ふべきに。義盛を悔るか。夫の曾我を憚るか。とうく座敷へ出でよと申せ。それさなきものならば。夫がためも悪しからん。山下宿を追出せ。フシ朝比奈えいとぞ怒らる。地虎は心にそまねども。天下の執權和田の心に背きては。夫の爲も大事ぞとオクリやがて座敷へ出でければ。朝比奈大きに悦び白銀の大盃。黄金の銚子取添へて。虎御前の思ひざし誰になりともさし給へ。朝比奈お酌候と。フシ節もしどろにいひければ。地北の方とりあへず面白し思ひざし。我つまならで誰かはとだんぶと引受け口をつけ。十郎殿十郎殿と呼びかくる。鹽治囃しきたまられず祐成これにと

つと出で。差いたりや虎御前のうだりや十郎と。手酌に三盃引續けく。息なしにといくく。サア打ち越は和田殿へ。慮外申すと投げ出し。女房に引つ添うてあたりを睨んで控へしは。觀音二十八部衆のフシ金剛夜叉ともいひつべし。地師直はつと仰天せしが弱氣を見せじと大様に。調ヤヤ九十三騎の人々和田におくれを取らするな。十郎をひつ立てよとはいひながら當座の興。鹽治殿のひけでもなし師直に意趣も残りぬ。地和田酒盛の本文に合せてひつ立てく。と。笑うて見ても色違へ一座の。而々こはくも太刀に手をかけうぞぶるふ。鹽治なほも事ともせずつ。立ちあがつて。折節弟の時致は。古井といふ所に矢の根研いでるたりしが。地胸騒こそ心得ねと鏢とつて投げかけ。馬に鞍おく隙もなくあらひ響に肌舂馬。廻れば三里會我中村草駄天よりもなほ早く。長者の門に馳着いて女房に案内させ。障子の陰より窺へば古郡新左衛

門。ゑびた兵衛あしだ兵衛。すのさきの孫太郎。主ある女の太鼓持追従面のむやくし寺。上座は今日の和田殿。朝比奈出して草摺曳させぬか。朝比奈出さぬはおくれたか。地和田酒盛をくひさすな。なすびの高の師直と。フシかんらくとぞ笑ひける。地ヤヤ酒宴の座興を眞事にして事を好むか鹽治殿。調薬師寺實の朝比奈ならねば御邊も本の時致ならず。力も知行も等分の千日曳いても勝負はあらじ。地加勢々々と呼はればこゝはの侍。我秀らじと。上帶草摺脇楯にむんずく。と取付いたり。物々し珍し。時にあうたり時致が。時こそかはれ草摺曳力は更にかはらじな。舞臺の板を踏み抜いて眞逆さまに人なだれ。音羽の瀧のたきつ波三筋を四筋になすものか。腰の番を振ち切るか一足さらすの勝負ぞ。飾磨の徒歩路清水の堂もゆるけと踏みすゑて。腰をすゑのの朝風朝比奈ならぬ腕首も。多勢に無勢敵はじと力聲はゑいさらゑい。ゑいや

車見物師法好兼

くゝゝんや鹽治判。官が。觀音力は普陀落
や。熊野の浦の鯨網數千人の海士人を。大
の鯨が鰭振りて沖へ。沖へと沖津波磯へ磯
へと磯打つ波。巖を叩く其の響踏み止め踏
み弛め。腰を捻つてゑいやつと一振り振つ
て地ふり放せば。思はず一度にくゝゝ

額と額打ち合せ。尻居にどうと打つたる音
フシ山にこたゆるばかりなり。地サア草摺曳
が終つては時致が和田殿に。はなめづらし
う見參とつと通つて師直が。馬手の膝に
どつかりと乗りかゝり。詞惡しう候義盛殿
虎が盃お望みならば時致お酌仕らん。何と
くゝと乗つかゝるはフシ大磐石の如くなり。
地師直が諸膝も折るゝばかりの痛さをも。
咎めばいかゝと息をつめがたくゝふるひ。
詞ア、くゝゝ和田酒盛をもう置いて。あ
れあの繪馬は澁谷の金王が。長田の庄司を
きめた體。地貴様は金王我は長田が頼ふ所。
ア、くゝ御免々々御助け。直ぐに長田は都
をさして落行くところ。學んで見せうと云

ひも敢へず、フシひつ外いて逃けて行く。地
夫婦諸共立塞がりこれくゝ。金王はか
りて寂しくば。あれ御覽ぜ、薙刀持つたは靜
御前。弓を引くは泉が城。地自らそれとは
恐れながら八幡宮の御母御。鬼界高麗百濟

國の。あらし夷を攻滅して。かへる君が代
千代に八千代に。いはほに弓をおつとりの
べて異國の王も師直も、犬に劣つた今の世

の梶原が譚奏にて。義經討手の土佐坊正尊
武藏坊辨慶が。色も眞黒黒の駒尻馬乗つた
が御所望か。かすくゝ多き繪馬の内望み次
第にまなんで見せん。詞あの張良が流れ足
樊噲が門破。鬼と餓鬼との首引に鬼は弱味
哨手播木。地ゆるせかお馬か駿馬まだ放駒。
我が美人草あやめの前に今夜はじめて源三
位。名をば雲井の弓張月たぐひ。なく聲鶴
といふ。變化を押へて九刀刺通し刺通さん
もさすが又。地ッ、大慈大悲の佛前と命助く
る盛久や。景清の繪馬あり富士見西行文字
人丸。竹に虎の毛をふるひ龍は雲を捲登り。

梯子さいて月代刺る福祿壽の長頭。長居は
それは迄と夫婦手を取り立歸る。扱こそ音
羽の龍の絲結ぶ繪馬の夫婦の中。諸願成
就皆令満足と敬。てこそ歸りけれ。

中之巻

友とするに悪しき友七つ良き友三つあ
り。一つには物くるゝ友二つには醫師。智

ある友こそ益者なれ。爰に侍従が父太秦
の又五郎。もとは火焚の衛士なりしが今は
僅の秋の田や。借らず負はずに四人口昔の
烏帽子白丁より。嬈が手織の衣手に。露の
世渡り共稼。フシ寢さめを樂と暮せしが。地
けふは心に祝事あたりの衆にいざ給へ。搔
餅召させんと東隣の與茂九郎。川端の彦
六兵衛草堂の具覺坊。藪際の小吉の娑向の
おこほの嬈までも。呼び集めたる酒肴鮎の
素干乾鮭や。味噌のついたる土器も亭主が
心一ばいなり。詞在所の者ども口々に。目
出度事とおしやる故辭儀もせずに参加が。
いかいさうさをおめさる目出度とは何事。

聞いてともく喜びたいといひければ。されば悦んでたも。こちの娘侍従が事。父にも母にも似をらいで色白に生れつき心までが器用で。吉田山の兼好様にかねよしの折から。歌とやら歌學とやら習うて。御所へお出入し。おらが娘に似合はぬ侍従といふ名を下され。それから武家方一ぱいに。今の世で誰あらう。高師直様のお目を下され。出雲の大名鹽冶殿藥師寺殿。方々へ出入して絹巻物を戴く。時々お金も下さる。今年といふ今年作つた麥は賣つて了る。師直様から下された米の飯をしてやつて。此の様に肥りがつく。地燥が膚を擦つて見れば皺が延びてすべくと。思はぬ謀叛が起つて来る。何處ぞで義兵を擧げさうなと、フシとつと笑うていひければ。それは誰もあやかりたいシテ娘御はどこへぞ。盃も頂きお大名の結構な。咄もちつと聞きたといへば女房さればの事。大名様といふものは結構な事も結構。我が儘なものな

れば御機嫌が取りぐるしう。こちの娘もいづぞやからちとお氣に背いて。久しうお召なされぬ所に。御機嫌が直つたとて乗物持つて。今朝お迎が來ましてその祝に此の通。地大事の娘が出世の祝何しても飽はなけれども。細長う祝ひましょ一つ過ぎて下されと。嬉しがれば在所の者仕合な娘御や。其方やこちらが家の内。乗物の出入は葬禮でもならぬ事。こちのお婆の葬禮には桶さへろくに買はいで。香の物桶へ入れたれば。案の如く火葬の時焼味噌の嗅がして地をれから茶漬食ふたびにお婆の事を想ひ出し。今でも涙がこぼれると。とつてもつかぬ物語。フシ在所酒もり聲高し。地時に表へ徒歩の者乗物舁かせて。別親父殿宿にか。侍從殿歸られた。別して殿にも御機嫌よく御前にて大酒。地づなう酔うて寝入つてぢや乗物共に置いて行く。先づとつくりと休ましやと、フシいひ捨て、こそ歸りけれ。又五郎威嚴顔あれお見やれ。二本差を供につ

れ乗物に寝て来る。地あやかり者であるまいかこれ喚乗物では窮屈がらう。そつと抱いて寢所してほんに寝さしよと戸を開けば。血みどろの女的首ころく、と轉び出でにける。わつと座中が立退きて、フシわなくと慄ひ恐れしが。地怖い中にも母親はなう父悲しやこれは侍従が首なるわと。抱き付けば又五郎はて何をいふ。今朝家を出るまで。首はたしかに胴についてあつたものと。地夫婦軀を引出し撫でつ擦つ押動かしハア。ほんに首が無いなう悲しや何とせん。やれ娘よ侍従よ如何に酒に酔へばとて。首の落ちるも知らぬ程酔ふといふ事あるものか。醒めたら首がつきませう。酔を醒ましてくれよとて、フシ狼狽へ。歎くぞ道理なる。地在所の者ども氣をつけて内輪でいうてもすまぬ事。今の送りの侍を引きすり戻し穿鑿し。師直様へ言上せんと。我も我もと追つかけしが、フシ程なく引つたて立歸る。侍ちつともひるまず。其の女は大罪人。主

君師直卿の宮と申す姫宮に。御心を掛けられ御縁組極まりしに。吉田の兼好と心を合せ姫宮を悪女と言ひ消し。鹽治判官が妻を寝めそやし勸めこみ。中立を請取り大分お禮を取りながら。叶はぬとて身を引く其の科にて地お手討。死骸を下され親一門命のあるを。有難いと存じませと、フシ睨みつけてぞ歸りける。父母わつとばかりにてスエテしばし絶え入り歎きしが。又五郎齒軋みして。エ、口惜しや下々には生れまいもの。

地まんざらの無理殺無成敗にあひながら。此の恨さへ云はれぬかいかに天下の上に立ち。權柄がしたいとて主ある者に執心かけ。叶はぬ程に中立を手討にしたとはどうした掟。大分禮を取つたとくちごひにして貰うたか。千萬反の綾錦萬々石の俵物。金の湧く泉でも買へる娘の命ぢやない。其の日の過ぎの又五郎も日本の長者の師直も。命の惜しいは同じ事貰うた物は皆返す。娘が命返しをれと。絹巻物黄金を投げ出し投げ出し。命あつての乗物と扉微塵に踏み破り。フシ首を。抱へて泣きければ。地母は骸を抱き寄せ。最早接いでも若くまいかとかつばと轉び泣くを見て。ありあふ土民心無き。尼嬪迄も諸共に、フシ袖を絞らぬ者はなし。涙す、つて又五郎やれ娘よ。貧な親を貢ぐとてよしない事に頼まれ。敢ない死にをしたらよな。師直が戀が叶はぬとてそちが身の科でなし。其の分ばかりで殺しはせまい追従面の出入の奴が。支言か偏ねしか。但し師直が心一つか恨と思ふ者あらば。死靈となつて憑いてくれそれをしるしに此の父が。錆たれども九寸五分大名でも高家でも。胸中を割つて娘の敵を取つて見しよ。其の科で父や母獄門も磔も。悔しいとは思はぬ親の歎が天道様へ。届けかし通ぜよかし力を添へて此の恨。晴れさせて給はれと首を天へ差向けく。月日は無理を照さぬにようもく、大事の子を。何故に斬らせて下さつた天道様から恨ぢやと。口説き立てかき

口説き、ノシ聲も。惜ます。泣きぬたり。あたりの人々とりく。亡者の後世もいか、ぞといたはり送る仇し野の。露消ゆる時なく鳥部山の煙立ち去らで。住み果てね世は定めなやはかなや。悲し。花は盛りに月は隈なきをのみ見るものかは。雨に向ひて月を戀ひ垂籠めて春の行方。知らぬもなほ哀になさけ深し。咲きぬべき程の梢ちり。萎れたる庭なんどこそ見所多けれ。男女の情も偏に相見るをばいふものかは。逢はでやみにし憂さを思ひ仇なる契をかこち。淺茅が宿に昔忍ぶと、フシ書き葉てし。地反古紙帳に燈火の仄にうつる影法師。月かとはかり涼しげに簾の破を洩れくるも。邊にあらぬ空柱やオクリ岩に、堰かる、遣水のフシ。音清らかに。通ふとも知らざれば。姫宮はた人の姿に御身そめものの。袂かい取りて竹椽に、フシ暫し休らひませば。フシ人目稀なる。山里の。根笹にすだく藪蚊まで。女の肌

珍しゆに。拾越しさへ面憎とヌエテ拂ふ袂の
追風に。地紙帳動けば兼好の影もゆらゆら
ふら〜と。筆持ちながら大欠伸。フシ名
間離れて住みなせり。地姫宮言ひ寄る便も
なく。ア、申しちと頼みませう。頼みませ
うと宣へば。調誰ぢや夜中にやかましい。
地又歌の點取か但しいつもの豆腐屋か。歌
學より田樂せんフシ一丁置けとぞ答へける。
地姫宮も一筋に爰はためらふ所でなしと。
紙帳打揚けつゝと入り。調面白い草紙が出
来るけな。硯の墨でも磨りましよかと。地
机にもたれ寄り給へば兼好机引つ抱へ。紙
帳の外へ逃げ出でて。なう〜豆腐かと思
うたれば。若い豆腐の姥が来た。いかう乳
が張るさうなが。此の法師の向はないと
フシ草紙を書いてぞゐたりける。地乳飲む事
がいやならば無理にとはいふまい。乳母は
子を抱く者いとし者ござれや。抱いて寝ね
しよと取附けばあれん〜と聲立て。紙
帳の中へ逃けて入る。テ、そのうちは蚊もな

うてなほよからうと。跡を追うて入り給へ
ばなうもつけやと駈け出づる。宮も續いて
出で給へばこれ紙帳がたまりませぬ。調あ
んまり暴れさつしやるな。地宮様ともある
人が紙帳に寝た事なささうな。下卑た〜
と打腹立ちフシこそ〜這うて入りければ。
地宮も赤面まし〜と。調ム、名間離れし
兼好の筆先に偽あり。此の書きかけし草紙
を見れば。こゝろ深き文章の。地中にも萬
にいみじくとも色好まぬ者は。玉の唇の
底なき心地と書きながら。此の端なき振舞
は筆に書くは偽ごと。徳を飾りて名を求
め名聞賣僧の嘘つき。玉の唇の底抜と。誹
られて紙帳の内嘘。くさめ〜も我なが
ら物狂はしと書きたるは。是かや籠に人聲
して。氣違よ。〜。氣違よ〜狂ひ。狂
ひて 三重 調やあく〜。童どもは何を笑ふ
ぞ。なに物に狂ふが可笑しいとや。地可笑か
笑へちつともそつとも大事もない泣いつ。
笑うつ。育てあけたる我が娘。われが小雀

フシ驚の。地卵の中の時鳥しやが父に似
て父に似ず。母になほ似ぬ姫瓜の。つるに
なれ〜なれし雲井に隠れなき。調侍従と
いふはこの子よなう。地みめようてふりよ
く古今萬葉伊勢物語。歌は人麿伊勢小町琴
の手もよし琵琶を弾く。調か報か何の仇に
か。あへなくもたが一討ちにきり〜す。
野邊に送らず身を放さず。これ三界の首枷
ぞやあれ。討たれしとは感言よ。父を見
て笑ふか。歌いとし娘によい殿持たせ。孫
を備けて爺や媼が。老の頼の杖柱。地杖も
柱も折れ果てた。親は何となるべきぞ折れ
たる杖はつぎもせん。つぐにつがれぬ娘の
首本の如くについでたべ。首ついでたべ人
々なう杖の下にも歌まはる子はいと。盛
親僧都の芋頭。芋よ〜どの子がいとし。
むかひ殿狗は。未だ眼が開かぬ。お壺に
飯いれてころ〜やころび伏してぞ。

フシ泣きるたり。ツレ地侍従とあれば姫宮も
若しそれかはと御涙。浮ぶばかりに見えけ

帳の中へ逃けて入る。テ、そのうちは蚊もな
笑うつ。育てあけたる我が娘。われが小雀

れば。ワキものに泥まね兼好も。慌て驚きよく見れば狂人は侍従が父。扱は侍従は討れしか。師直が業ならんとステテ落涙袂をひたせしが。ア、狂人とな厭ひ給ひそ。人間の境界いづれか狂氣にあらざるや。蟻の如く集りて何ごとをか營む。地昨日は歎き今日は笑み。朝に怒り夕に愛し。財に繋かれ名に纏まれ露の命を危ぶむは。皆狂人にあらざるや。兼好が作る草紙徒然草の大意を得たり。あの物狂を我が師と頼み。フッ書きつらねんと筆をとる。ツレ地宮も發明まし〜て狂人走れば不狂人。走るも追ふも物狂扱正氣とは。ワキ生れぬ前の法性。ツレ覺むる期ありや有明の。二人フシ止觀の窓の月の影。峰の木隠れ雲隠れ常に照らすと知る時は。いづれ別を悲しまん歎を止めよ狂人と。ステテさまさま慰め諫むれば。シテクセ地を走る。獸。空を翔ける翼まで親子の地あはれ。フシ知らざるや。地況んや佛性同體の人間。子と生れ親となる父ト

母とが諸羽交。育み立てし雛鶴の松に歸りて獨りたつ。身は唐崎の一つ松。フシ額に志賀の謎や。頭に比良の暮雪にて。まだ消えもせず存らへて。世に住吉の松の思はく恥かしやな。ある僧の曰く。蕪サツつら〜世間の現相を觀するに。飛花落葉の風の前には。有爲の轉變を悟り。電光石火の影の裡には。生死の去來を地見るといへり。去りては來り歸りては往來の人にも問はう。娘は二度歸るかなう。ワキもとより來らぬ道芝の根にかへるとは見つれども。同じ梢に咲き匂ふ變らぬ色を見給へや。シテ面白や思子の遂には孫の親となり。ツレ親又親の子なりけり。二人親子は假の名のみにて時に従ふ花の春。シテ紅葉の秋と變れども。二人松竹櫻。シテ梅柳三入くるり〜と小車の。廻る輪廻の。風車。風にもあてじ撫子の。木花咲耶姫の御神木の花ならば。風も過ぎて吹けや吹け。シテあたら櫻のとがは散るぞ恨みなる。

よし恨むまじ歎くまじ。泣くまい泣くまい啼かぬ鳥の聲聞けば。生れぬ先の我が子戀しき。いと我が子を何に譬へん門田の早苗よ。歌なせ〜しよんほりしよほりと。植ふたもの。シテ今來る秋に刈ろすよの誰か刈らん。二人植ゑい〜早乙女。笠買うてとらせん。シテ笠買うてたもるならばなほも田をば植ゆべし。歌笠買うてたもれやこれの涙。ハツミ涙ふるよの。あらフシ暗の夜や。二人夕暮は扱何と。シテ一方ならぬ思かな。二人曉は又如何。シテ數々多き歎かな。我が爲ならば雪もよし降れ。雨もた降れ。露も降れ〜。なう我が子のあるならば。フシ伏屋も寝よけなるべし。ワキ我が子に心を盡し〜て。シテ我が子に心を。つくし〜て年の數々讀みて見たれば。十三五つ嫁入盛りよ嬉しやとて。吉日を選び。二人急ぎてやらん姿は如何に。シテ笠も見苦し花染被衣。二人蓑をも脱ぎすて。シテ花摺衣の色驪。

二人待つらんものを。三人すははや今日も。紅の下紐も、フシ誰に解かせん解くべきと。生先までを。思ひ來し。待ちし月日も幻の。シテ夢ならば又も見ん二人現ならば其の儘見ん。シテ夢にも劣り二人

現にもシテはかなきものは我が娘。娘よやよと喚びめぐり尋ねても求めても。かひも涙の瀧の絲、フシ亂れ。心や狂ふらん。ワキ兼好見る目も痛ましく。いいでく教

化問答して迷を開き得さすべし。如何に狂人。佛といつば何者が佛にはなる。サア何が佛になるやらんシテ愚の仰候や。スエテ佛に別の種はなし。佛の教に従ひて人が佛になるごと。ワキ兼好佛の教によるならば。教へし佛は何故に佛にはなり給ひしぞ

シテそれこそは其の先の佛の教候。ワキ兼好其の先の佛とは。シテ又其の先の佛の教。ワキ兼好又その先のその先の。教へ始めし第一の。佛の師とは如何に。シテハア天より降つたか。地より湧いたか木にな

つたか。地蔓に下つた瓢箪のフシ川流。なりんでもないもの南無三寶。一心一念の本佛は無心無念の一佛より。教を受けて久遠劫悟あれば迷あり二人逢ふ世あれば別あり。シテ君子あれば仁義あり二人家あれば鼠ありシテ佛あれば衆生あり。三人衆生あれば狂人もあり柳は緑花は紅。ただ一ことの教にて。狂亂も晴れ。フシ本の正氣に立ちかへれば。二人姫宮も煩惱の愛着の花散るや。シテウタヒ鐘も鳴り二人鳥も八聲にシテ月も早や三人影傾きて四方の遠山蔓絶えなくに。岡邊の松も地ほのくんと隙白。くこそなりにけれ。シテ兼好

は此の時につれなく草二卷。三人二百四十餘段に書捨て。残す藻蘆草風月のなさけ後世の道。人の心世の有様蟲の鳴く音に至るまで。其の折々を博士として。隠遁の情を地現せば。物狂ほしや物狂。是も思へば師なりけり縁も。三世の御佛に。花奉る時ぞとて。各打連れ朝霧の山路。踏分け。三人入

り給ふ。フシ卯の時雨の。地朝虹に光り合ひたる赤絲織。汗に絞りし若武者の鎧に露の白玉か。玉のやうなる上臈を母衣の如くに負ひなして。もみに紅葉の指傘は母衣の山車とも擬はせて。庵室に走り入り御庵主にちと御意得たし。御庵主。御庵主と呼ばはつても音もせず。扱は留守よな。地留守にもあれ此の紙帳の内に御忍び。主歸らばしかくの御物語候て。御頼み候ふべし追手急に候へども粗忽の御自害あるべからず。主君判官殿はや討たれさせ給ふ上は。我々とても世に存らへぬ命なれども敵師直を討つ迄は。先づ御忍びと申すにも北の方は涙にくれ。判官殿あへなく討たれ給ふ上は何を頼みに在るかひも。なき身なれどもと紙帳打上げ入らんとして。調なういぶせやと飛んで出で。あれを見よ六郎紙帳の内

に女の首。地米に染みて見えたるは人の住家と思はれぬ。凄じさよと宣へば。調工エ何がな御目に見えつらん。兼好といふ大

314

道人の庵室に奇怪のあらん様はなし。そこ
退き給へと紙帳をあけ見れば如何にも女
首の首こりや何ちや。四五日以前に切つたる
首の色も變らず眠るが如し。疑もなく兼
好の留守を見かけて山賊の業ごさんなれ
地何にもあれ天の鬼此の首を以て敵を欺
き氣を弛ませ。追手を四方へ驅散し御本意
違けさせ申さんと首。フシ提げ飛んで出でに
けり。兼好法師は聊の官又五郎諸共。花
摘み庵に立歸り紙帳の前には水手向け。香
筆を供へ。南無幽靈即往。南方無垢世界。
座法蓮華成道正覺と。回向も未だ終らぬに
内より女の聲として。詞コレ兼好様。兼
好様と喉の聲の耳に入れば兼好不便や扱
は迷ひたか。親の歎極宮の怖さもさぞと聞
かぬふり大聲に南無幽靈南無幽靈と。紛ら
かせども兼好様。南無幽靈兼好様。これ申
し兼好様と。ひらりと打上げにつこと笑ひ
顔さし入るれば。そりや幽霊よと親ながら。
わつと逃けて身を縮め。ツシ椽に食付きるなり

けり。兼好からくくと笑ひ。詞ヤレ首ば
かりと云ひ死したる者。二度生きん様や有
る。主なき家には狐鼻木精なんどの入る
如く。首に魂なき故に野干の魅入り疑な
し。地獄に殺せ青松菜生葉よと再びく聲
なう恐ろしやさらく左様の首ならずと。
逃げて出で給へばあれ又出たは。兼好様頼み
ますとツシ袂の下にこもり寄り。此處を大
事と絶り付き又五郎震ひく。詞娘これは
除な見知越に胸怒ぢや。御事が修羅の
苦患より父がこはさを推置せよと。涙を流
せば姫宮も。親の身でさへ厭なもの。他
人の怖さを思ひやり。搔消すやうに消えて
たもと。ツシ怖ぢさせ給ふも道理なり。地北
の方も詮方つき。詞さては最初の首につい
ての不審かや。自は鹽治判官高貞が妻。
高の師直邪の戀に遺恨を含み。鹽治判官
逆心と將軍家へ讒言し。地討手向へば我が
夫も。所詮鎌倉に落ち下り申し開かん爲。

昨日東に赴き給へば師直追駈け上意と偽り
詰腹切らせ自らは。詞八幡六郎と申す家の
子相具し落ちし所に。師直が追手殿しく跡
先を包まれ。やうく遁れ御留守ながら斷
り討たんとて。地狼藉ながら其の首は八幡
太郎が奪うたり。人の命の助かる事亡者の
爲も悪しからじ。許してたべと宣へば扱は
鹽治殿の藤中か。こなたは聊の姫宮彼の首
は侍従。師直が無體の手討これこそ父又五
郎。皆師直には遺恨の者世を憤る兼好が。
もとより悪には與せぬと勇み給へば又五郎。
詞師直めを討つ爲ならば。侍従が首は申す
に及ばす。幸ひ手前に持合せた。此の親父
が首も取つてござれ。此の又五郎年寄つて
深い事は存せぬが。敵百人までは請取つ
たと。地いひもあへぬに釐に関をどつとつ
くり。雨の如くに飛び來る矢先拂ひ兼ねて
三重。立ちあたる。地所に師直が侍大將小林
民部。直兇百騎ばかり庵の庭に込入つて大
音上ゆ。詞ヤノ。兼好法師只今八幡六郎

兼好法師只今八幡六郎

兼好法師只今八幡六郎

兼好法師只今八幡六郎

兼好法師只今八幡六郎

兼好法師只今八幡六郎

兼好法師只今八幡六郎

兼好法師只今八幡六郎

兼好法師只今八幡六郎

兼好法師只今八幡六郎

兼好法師只今八幡六郎

が。鹽治が妻の首と偽りしは侍従が首。然れば女を庵室に匿へしに紛れなし。此の首を返すからは鹽治が女房ひつ立て歸る。地サア踏込め者どもと首を庵へ投込んで。我もくと亂れ入るさしつたりと又五郎。鐵押取つて立塞がり。ヤアさせぬ。かういふは侍従が親。もとは大内火焚の衛士今は百姓。師直は娘の敵。お出でなくとも此の方からお見舞申さうと存じた。かう並んだお侍。なんほう取つても一人前高が五石か八石か。十石づつの太刀さきでも。十本で百石百本で千石。此の親爺は鐵一本で何萬石か作り出す。幾人でもサアござれ一足でも引くまいため。ふんばちかつた又五郎サア地片端から己ればら。小麥島に打ち返し微塵に茄子眞桑瓜。西瓜の戦時の運命は水の粟稗。名こそ惜しけれ菜島にゑく芋頭鉈豆割り。眞島踏出し元首取つて午莠抜き。血しほに染めて眞赤いな唐辛島にしてくれんと。眞甲肩骨腰の骨脛首膝口嫌なく。泥田にほうと打立て。籠の。岡へと三入追下す。フシかゝる所に。地八幡六郎數個所の手負ひ敵二人を左右に受け。朱になつて来りしが一人の敵隙を見て。北の方に飛び

かゝる兼好机おつ取つて。受けつ開いつかけ隔てよるほふ所を押付けて。機の上のつか、り是六郎。此の机で書いたは徒然草今は彼奴をきれん草。地サア切れくといふ隙に六郎敵を切伏せて。走りかゝつて一打に首打落すぞ心地よき。六郎息もつぎ敢す。先づ目前の敵なれば追手の大將小林を。たゞ一打と出でんとすれば又五郎小林が。眞甲に鐵打立てゑいやゑいやと引来り。かつばとひつすゑ胸中をしつかとふまへ。鐵の先で仕出しては。地頭殿へ驚るが百姓の法なれど。是は小林の新聞。地作り取に致さんと鐵ふり上げて頭より。脊骨迄打立て。五體碎けて骨ひしけ微塵になつてぞ失せにける。眞六郎を始め同音に手柄々々と褒め立つれば。又五郎かぶりを振つていやくとさうでない。我百姓の事なれば菜大根を大事にかけ。鐵を使ひ覺えし故只今の働は。眞島に生えた土大根の精靈大こんの者。とはいひながら。情なや。親が大根なればとて。娘の首はかぶらぢやとフシわつと泣くこそ哀れなれ。兼好も涙にくれ何事も前世の業。地先づ此の觸腰を葬らんで兼好

が引導せんと。觸腰に向つて合掌し。兼好おつ取つて圓相なし。南無幽靈。汝元來土百姓の娘。土より出でて土に入る。三惡道の苦は脱けて。佛の種を蒔くぞ嬉しき。地南無佛南無法南無僧と。共に唱ふる回向の聲に恥ぢて退く敵の勢。仇も恨もわが心阿波の。鳴戸の波風も渡りくらべて世の中を。目出度く悟る隱遁の靈を。筆にぞ残されし。

右之本令吟覽頌句音節墨譜
 等不殘毫厘令加筆候可有開
 版者也

竹本筑後掾
 重而予以著述之本令校合候
 畢全爲正本者歟

近松門左衛門
 正本屋山本九兵衛版
 大阪高麗橋壺丁目
 山本九右衛門版

竹本
 教博